Society of Japan Science Teaching

児童の季節感の定着度についての調査研究

A Research about Retention Rate of Children's Season Sense

○永田　和久[A]　　野田　敦敬[B]
Kazuhisa NAGATA　Atsunori NODA
愛知教育大学４年[A]　愛知教育大学生活科教育講座[B]
Aichi university of education

あらまし　近年，日常生活において自然とのふれあいが薄れ，季節感を感じることが少なくなってきている。そこで，本研究では，１～６年生の児童の季節感の定着度ついて調査を行い，その実態を明らかにした。今後，意識調査の結果を踏まえ，季節感を身につけさせる効果的な方法について探る。

キーワード　生活科，季節感，自然との関わり

Ⅰ　研究の目的

近年，日常生活において自然とのふれあいが薄れ,季節感を感じることが少なくなってきている。技術の発展に伴い，スーパーマーケットなどで一年中同じ商品が並べられ，エアコンの普及によって年中変わらない衣服で過ごすことが可能になっている。そのため，生活の中で季節を感じ取ることが少なくなっているものと考える。また，少子化や地域社会との関わりの希薄から，祭りなど季節を感じられる行事も減ってきている。

平成20年版学習指導要領解説生活編の内容(5)にも，「身近な自然に目をむけ，興味･関心を持って観察したり，季節や地域の行事に関わる活動を行ったりして，四季の変化を体全体で感じ取り，季節によって生活の様子が変わることに気付き，自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできるようにすることを目指している」[1)]とあるように，季節感を体験活動の中で身につけさせることが重要視されている。

そこで,本研究では児童の季節感の定着度についての意識調査を行い，結果を分析･考察し，今後の指導に生かすことを目的とする。

Ⅱ　意識調査について

調査時期：2009 年６月～7 月
調査対象：刈谷市立Ｆ小学校の児童 700 人
(1 年生 125 人，2 年生 109 人，3 年生 113 人,4 年生 121 人,5 年生 120 人，6 年生 112 人)
調査方法：質問用紙
調査内容：児童の季節感の定着度について

以下の５観点で調査を行った。

・気象，天体　・生物相
・生物の成長過程　・生活　・行事

Ⅲ　結果と考察

○学年が上がるにつれて，正答率が高くなる項目が多く，年齢を重ねるとともに季節感の定着度が増すと考えられる。多くの項目において，低学年での定着度はあまり高くないことから，低学年の時期から自然や地域の行事と関わる体験を行い，季節の移り変わりを感じる必要があると考える。

○夏の項目は比較的正答率が高いのに対し，その他の季節，特に春と秋の項目については，正答率が低かった。

○全体を通して，行事や天候，生活に関する項目は比較的正答率が高いのに対して，生物相や生物の成長過程に関する項目は正答率が低かった。外で遊ぶ経験や，自然体験の減少により自然と関わる機会が減っていることが原因なのではないかと考える。

Ⅳ　今後について

児童の季節感の定着度についての意識調査から，日常での自然と関わる機会の減少が，児童に季節の移り変わりを感じにくくさせていると考えた。今後は，意識調査を参考にして児童に季節を感じさせることのできるような効果的な方法について探っていく。

文献

1）文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版　2008　p. 31

NII-Electronic Library Service